新春対談　スポーツの可能性とまちづくり

令和２年は、東京オリンピックの開催や、帯広市新総合体育館のオープンなど、スポーツが注目される年です。誰もが生涯にわたって楽しめ、心身の育成や健康増進、まちのにぎわいづくりなどにもつながるスポーツのさまざまな可能性について、プロのバスケットボール（以下、バスケ）選手として活躍している折茂氏、多嶋氏に伺いました。**担当課**　広報広聴課

スポーツを通じた十勝・帯広の印象

市長　毎年８月に帯広で合宿を行っていただいていますが、まずは帯広を合宿地に選ぶ理由を聞かせてもらえますか。

折茂　帯広は札幌からのアクセスが良く、夏は気候的にも過ごしやすいです。シーズン前の大切な時期に、帯広で合宿できることに感謝しています。

市長　帯広出身の多嶋さんにとってはふるさとですが、いかがですか。

多嶋　毎年、オフシーズンにまずは個々の体づくりをして、チームとして仕上げていく時期に、帯広で合宿を行えることはありがたいです。両親に会える良い機会でもありますし、おいしいご飯を食べながらチームづくりができることを、うれしく感じています。

市長　スポーツを通じた十勝・帯広の印象はいかがですか。

折茂　僕にとって帯広は、レバンガ北海道を立ち上げてホームで初めて勝利を勝ち取った地でもあり、非常に縁深いと感じています。初勝利にファンの方が泣くほど感激してくれたことが、思い出に残っています。

　また、子どもたちが15時開始の試合に冬でも早朝から並んでくれるのは帯広だけなので、非常に熱心でスポーツが盛んな地域というイメージがあります。

多嶋　僕もそう思います。札幌はチーム数も多いし強いのですが、札幌に対抗できるのは帯広だと思っています。全道大会などで優勝するには札幌のチームに勝たなくてはいけないので、バスケに限らず、「打倒、札幌」の意気込みでスポーツに取り組んでいる子どもたちが帯広には多いと思います。

市長　実は、帯広のバスケのチーム数は札幌に次いで２位です。帯広では人気のあるスポーツだと思います。

勝ち負けの経験から学ぶこと

市長　私は中学生から始めたバレーボールを通してチームプレーを経験し、誰か一人が上手でも勝てないことを学びました。

　お二人も、勝ち負けの経験から学んだことがあると思いますが、いかがですか。

折茂　スポーツには勝ち負けがあり、負けた時の悔しさを学べます。僕自身は中学生の頃から弱いチームにばかりいて、「負け」から学ぶことが多かったからこそ、今の自分があると思います。

市長　勝ち負けがはっきりすることが、スポーツの魅力の一つなのかもしれませんね。

折茂　勝負の厳しさは、勝ち負けの経験でしか学べないと思います。僕らはプロ選手ですが、小・中学生とプレーをしても絶対に手を抜かないようにしています。プロである以上「そう簡単に勝てない」厳しさを、子どもたちに教えなければいけないと思っています。

　僕は息子とゲームなどをする時も、絶対に負けないようにしています。そうするとどうしたら勝てるのか、いろいろなことを子ども自身が考えるようになります。悔しさから何かを学んでもらえたらいいですね。人生そんなに簡単じゃないぞって。（笑）

プロになる前と後の変化

　僕も多嶋もそうですが、やはりトップ選手はみんな負けず嫌いなんです。負けず嫌いでなければ、勝負の世界で選手として活躍することは厳しいと思います。

市長　お二人は、プロ選手になる前と後では、気持ちなどに変化がありましたか？

折茂　僕は実業団チームを経験後、北海道に来てからプロ選手になったので、ギャップをすごく感じました。アマチュアは注目度も低いですし、立ち居振る舞いや態度は全然気にしていませんでした。プロ選手になって、人から見られているという意識を持つことによって、バスケ以外の行動や振る舞いも気にするようになりました。

　また、食事や体のマネジメントができなければ、プロとしてはやっていけないので、自己管理に厳しくなりました。特に若手選手は、体のケアや食事について、意識がとても高いと思います。

多嶋　僕はトップリーグの選手になりたい気持ちはありましたが、それが働きながらなのか、プロ契約をしてなのか、両方の選択肢がある世代でした。当時はまだBリーグもなかったため、その中で選択しなければならず、何が正解かわかりませんでしたが、運良く栃木のプロチームに入団できました。

　プロになってからは、ファンに応援されて初めて成り立っている職業なので、自分をどういう風にプロデュースしていかなければいけないのか考えています。一人の選手としての価値を意識するようになりました。

市長　私も市長になって、自分の行動や発言に注意するようになりましたし、食事や飲酒にも気を付けています。私とお二人とでは、一見、仕事は違いますが、公人としては共通項があるように感じます。

折茂　どんな職業でも、体が健康でなければ良い仕事は絶対にできないと思います。プロは体調の良し悪しに関係なく、結果で見られてしまいます。Bリーグが立ち上がって４年目ですが、僕は一度も風邪を引いていません。

市長　日頃の健康管理や意識など、プロとして厳しく管理されておられることに感心しました。

新総合体育館への期待

市長　２月29日㈯、帯広に新総合体育館がオープンします。３月７日㈯・８日㈰には、レバンガ北海道の主催試合を行っていただきます

対談者のお二人がバスケットボールを始めたきっかけ

折茂さん

昔はバスケには全く興味がなく、中学生の時は野球やサッカー漫画の「キャプテン翼」に憧れていました。バスケ部の兄が優秀だったので、先輩方に勧誘されて中学生からバスケを始めましたが、高校・大学と続けるほど夢中になりましたね。

多嶋さん

両親がバスケをしていたので、子どもの頃からバスケが身近な存在でした。しかし、僕が小学生の頃は３年生からでなければミニバスケット部に入部できなかったため、それまでは水泳やスケートを習っていました。

が、新総合体育館に期待することを聞かせてください。

折茂道内には、北海道日本ハムファイターズや北海道コンサドーレ札幌などのプロチームがあり、北海道はスポーツを「観る文化」が根付いている地域だと思います。

　これからの体育館は観戦しやすい環境であってほしいです。例えば観覧席の位置やトイレなどの設備、交通の便など、いろいろな要素があると思いますが、それらが満たされれば、誰もが観やすい環境になり、来場者も増えるのではないでしょうか。

　新しい体育館をつくることは大変なことだと思いますが、われわれはプレーで皆さんに感動を与えられるよう、そこで試合することをとても楽しみにしています。

市長新総合体育館の完成が、だんだんとプレッシャーになってきますね。（笑）

折茂今の総合体育館にも、子どもたちがたくさん観に来てくれますが、観覧席が少ないため、チケットに限りがありました。しかし、新総合体育館は、観覧席が今より増設されると伺い、子どもたちだけではなく、幅広い世代の皆さんが来やすくなり、われわれのプレーを観ていただく機会も増えると思うと、大変うれしく思います。

多嶋僕は小さい頃から今の総合体育館でたくさんプレーをしてきたので、いろいろな思い出もあり、まずは寂しいという気持ちがありますが、新総合体育館が完成することはとても楽しみです。

　体育館の雰囲気で、選手としてここはやりにくい、ここはやりやすい、心地良いなどの違いがあるので、新総合体育館には「ここでやりたい」と思えるような体育館になってほしいと思います。また観客の皆さんにも、「ここに応援に行きたい」と思われるような体育館になってほしいです。

市長スポーツをする側だけではなく、観る側、支える側を含め、総合的にマネジメントしてつくり上げていく必要があると、改めて感じました。

チャレンジすること

市長私はある人から「努力は夢中に勝てない」と言われたことがあります。努力が無駄という意味ではなく、リスクがあっても目の前のことにどれだけ夢中になれるかが大切ということのようです。努力することや挑戦することについて、どのようにお考えですか。

折茂僕たちにとって、努力は見えるものでも、見せるものでもないと思っています。「自分はこれだけやった」と言う人に限ってやっていない。アピールの必要はなくて、自分自身が納得していればいいと思います。

　子どもたちを見ていても、やらずに無理と言う子が多いと感じます。やってみて無理だったら仕方がないですが、やらずに無理と言うのは好きではないですね。成功する人はみんな失敗しています。やってみて、失敗から何を学ぶのか、そこから何を始めるのかが大切だと僕はずっと考えています。

市長とてもわかりやすいですね。多嶋さんはいかがですか。

多嶋僕の場合は、それが「好き」「夢中」になれるものだと思えたら、初めてチャレンジしようという気持ちが芽生えます。挑戦してさまざまな壁にぶつかって、どうしようと思った時に、次はさらに努力しようと考えるので、それらはすべてつながっていると思っています。

市長チャレンジは誰もしたことがない、誰も行わないことをすることだと思いますが、そうした気持ちや姿勢は、大人になってもなかなか持てない人も多いように感じます。

　しかし、小さい時からスポーツをしていると、試合などさまざまな局面を体験することで、チャレンジ精神は少しずつ身に付いていくと思います。

　十勝・帯広は開拓者精神があふれる場所と言われますが、挑戦し、諦めずにやりきる心意気は、十勝・帯広の人たちが大切にしてきたものであり、十勝にスポーツをしている人が多いことにつながっているのかもしれません。

スポーツとまちづくり

市長お話を伺って、市民の皆さんと、レバンガ北海道との接点を大切にし、スポーツに関わる人をもっと増やしたい気持ちになりました。

　帯広市は、昭和63年に「健康スポーツ都市宣言」をしており、スポーツに親しむことができる環境づくりを進めてきました。

　これからもまちづくりの柱の一つとして、スポーツを「する側、観る側、支える側」みんなで盛り上げていきたいと思います。

折茂スポーツは健康づくりにもつながります。僕自身、49歳になり若手選手と同じようには体が動かなくなってきています。

　もし僕が若手選手と違う特別メニューで楽をしていたら、あっという間に体が動かなくなって、今ここにはいないだろうと思います。

　やはり人間は、年を取っても体を動かしている間は健康でいられるのではないかと思いますし、不思議と、体は動かせば動くようになるものです。おじいちゃん、おばあちゃんが、90度に腰が曲がっていても、元気に農作業をしているのは、毎日体を動かしているからだと思いますね。

市長本当にそうですね。帯広に元気なおじいちゃん、おばあちゃんをもっと増やしたいです。

多嶋僕の子どもの頃は、帯広でプロチームと触れ合える機会はありませんでしたが、今は北海道にもプロチームができ、いろいろな形で触れ合う機会をつくれると思います。

　プロ選手と一緒にバスケを体感したり、プレーを観て「こんな動きができるんだ」と感化されて、まねをしたりする。その経験が、次のステップに生きてくると思います。

折茂僕たちは、特別なことをしてきて、プロ選手になっているわけではありません。本当に簡単なことを積み重ねる努力をしてきているだけです。

　レバンガ北海道には帯広出身の多嶋がいるので、「多嶋選手みたいになりたい」と思っている帯広の子どもたちも多いと思いますが、彼が特別なわけではないですし、子どもたちには可能性しかないと思っています。

　やり続けたからといってプロになれるとは限らないけれど、続けなければなれない。そこを頑張り切れるかなんです。

　自分は身長が低いから、足が遅いから、ボールが取れないからバスケ選手は無理だと決めつけることは楽ですよ。多嶋もバスケ選手としては背が低いですが、それを理由にしたらプロにはなれないんです。

市長確かに。自分を型にはめて、勝手に限界をつくってはいけないですね。特別なことをしているのではなく、小さな努力を積み重ねることの大切さは大変心に響きました。

　また、レバンガ北海道のスローガン「挑戦を感動に～北海道の明日にガンバレを～」は、とても良い言葉だと思います。感動とは「感じて動く」と書きます。何かを感じるだけではなく、自分や他人をも動かさなければならない。私は帯広を、挑戦する人がたくさんいて、感動がいっぱいある地域にしていきたいと思っています。

　今日は心を打つ話をたくさん聞かせていただき、ありがとうございました。プロとしてのホームでの1勝目が帯広だったことも、とてもうれしく伺いました。ぜひ新総合体育館での最初の試合でも、勝利を期待しています。

折茂多嶋はい！新総合体育館での試合を、ぜひ観に来てください。今日はありがとうございました。

2/29㊏
新総合体育館が供用開始!!

移動観覧席を含み、2883席（１階1280席、２階1603席）となり、従来の総合体育館の約３倍の観覧席になります！
※新総合体育館の詳細は12頁をご覧ください。

（完成イメージ）

3/7㊏・8㊐
レバンガ北海道主催試合の開催が決定しました！

バスケットボール Bリーグ

市民の掲示板３月号掲載の受け付け締め切りは１月20日（月）です　紙面の都合などで掲載できない場合もあります。　問広報広聴課（市庁舎３階、☎65・4109、F23・0156）